

◆特集 平和を求める女性たち

分断の気配にさらされ続け

20年ぶりに宮古島に帰郷して、これから穏やかに生活したいと思っていたその年に、生まれ育った集落のそばに陸上自衛隊のミサイル弾薬庫がつくられるとの報道がなされました。沖縄返還の際、県民の想いを「戦争につながる一切のものを否定する」としたためた屋良朝苗やらのあさひなほ主席の言葉のとおり、故郷に弾薬庫がつくられることに迷わず反対の意思をしめした両親とともに反対活動に身を投じてから、はや7年が過ぎていきます。

当初は反対決議をあげた各地域の自治会も、次第に容認に転じていきました。かろうじて私の住む地域は反対決議を維持していますが、一方で地域自治会には毎年これを撤回させるねらいで、防衛予算を使ったコミュニケーション交流施設を要請したいとする推進派の意見が挙がってきます。提案に異議をとなえると自治会内での対立とな

この島で明日を描く 軍備拡張が進む宮古島から

宮古島市議会議員

下地 茜



り、地域住民も内心うんざりしているようです。基地配備を受け入れた地域の宿命でしょうか、7年経っても分断の気配にさらされ続けています。

私たちが生活しているんだ！

弾薬庫・訓練場の工事が始まったのは2019年のことでした。当初、北側ゲート前の細い市道で、ダンンプカーの前を牛歩しながら抵抗を示した運動は、場所を南側のゲート前に変えて細々ながら続けられています。曜日によって人数はまちまちですが、市街地からの応援や、島外から現地を見たいと訪ねてくる人たちとのささやかな交流の場となっています。

新しい司令に変わった際には、ゲート前の活動について駐屯地から通報され、毎日地域の巡査が様子を見に来たものでしたが、そのうち通報はなくなりました。ゲート



2019年 南ゲートにて座り込み

ト前に立つ母は、「この地域に私たちが生活している、そのことを知ってもらうために日々活動をするのだ」と言います。配備が進んでいき、有事の際には全住民が島

外避難をするとして国と県・市が避難計画を進める状況の中で、それは重みのある言葉です。

この島で明日を描く

石垣市でおこなわれた住民避難を考えるシンポジウムで講演に立った元陸上幕僚長の岩田清文氏は、こう発言しています。「ジュネーヴ条約といるのがありまして、有事になった時に、軍人扱いの自衛隊と一緒に、住民がいることはできないんです」「仮に一緒にいると、住民はジュネーヴ条約上守られない」

国際人道法であるジュネー

ヴ条約には、第一追加議定書の基本原則として「軍民分離の原則」があり、有事の際には軍と民は分離されることとなっています。有事となつて、住民が暮らす小さな島にミサイルを置き、軍事拠点にしていくことは、「人間の盾」として戦争犯罪になりかねません。このことを避けるには、有事にならない前に島民が島から出ていくことです。そのため島の外避難計画が行政によって進められている状況なのです。

かつて硫黄島では、太平洋戦争のさなか島民が疎開して、その後、ひとりとして帰島することはできませんでした。国はその理由を「インフラの復旧が不可能」と説明しています。地下水が「命の水」である宮古島では尚更のこと、国の言うとおりに従っていけば故郷を失いかねない中で、あらがうひとつの方法として、「この島に住み続ける」ということなのです。

パレスチナの人たちが彼らの土地にオリーブの木を植えるのは、この土地に住み続ける抵抗の証なのだという話を読む機会がありました。この島で生活し続けることが、故郷を奪われないための手段です。種をまき、木々を育てるように、この島で明日を描くことにこだわり続けたいと思います。

(しもじ あかね)